

邯鄲の夢

信州イスラーム世界勉強会の e-定例会第 21 弾に、「アラブが育んだ宝石学」を寄稿後しばらくして、この勉強会による「モンゴル放談会」の案内があった。記録を読み、放談会参加諸賢の広大な視野、剛胆さに甚だ感銘を受けた。また、板垣雄三代表より、放談会で話題に上った張承志氏の『殉教の中国イスラーム：神秘主義教団ジャフリーヤの歴史』を薦められた。この本の翻訳者・梅村坦教授が、たまたま筆者居住地の町内会長に就任された偶然があり、ますます興味を覚えたのであった。それで、様々な論題の舞台となったアジア大陸の深奥に想いを寄せた。

ところで、中東と比べ、筆者とモンゴル、中央アジアとの関わりは、希薄なのである。しかし、1983 年 8 月、初めての海外旅行の折に北京から国際列車に乗車して、旧京奉鉄道・旧南満州鉄道・旧東清鉄道を経由して国境の街・満洲里に至り、さらに旧ソ連時代のシベリア鉄道でモスクワまで行き、そこからレニングラード（サンクト・ペテルスブルク）への夜行特急に乗り換え、飛行機でハバロフスクに戻り、まだ飽きずにナホトカまで鉄道の旅を続け、船で横浜に帰ったことがあった。その際、満洲里あたりは内モンゴル自治区フルンボイル市に含まれるというので、期せずしてモンゴルの大地を車窓から眺めていたと思い至った。

なぜこのような旅行になったかという
と、当時、中ソ国境の鉄道旅行が外国人に開放され、また、筆者が駒場の教養学部で学んだ第二外国語は、ロシア語だったからである。ロシア語にした理由は、英語とロシア語に加え、中華圏の人々と筆談できれば、世界中どこにいても何とかなると思ったからである。その頃のロシア語選択者は、1 クラス分しか集まらなかった。そのクラスに 3 人の女子学生があり、1 人が胡蓉暉さんという中国からの留学生であった。【写真 1】

胡さんの夫君は姚剛氏であり、同時期に東京大学に留学していた。筆者は、姚氏と話したことはないが、胡さんと姚氏が仲睦まじく佇んでいる姿を目撃したことはある。姚氏は、1980 年の「普通高等学校招生全国统一考試」で 530 点満点中 467 点の成績で首席となり、北京大学に入学した。昔の科举制度でいえば、「状元



【写真 1】 胡蓉暉さん

及第」の榮譽に輝いた。国際政治を学ぶかたわら、日本留学のための特訓コースに参加、1982年に東京大学文学部社会学科に留学した。同年、中国共産党に入党している。1986年に東京大学大学院に進学、1988年に修士号を取得すると、三洋証券に就職した。さらにソシエテ・ジェネラル証券東京支社など、外資系証券会社で腕を磨き、1993年、帰国して中国証券監督管理委員会に入った。姚氏は、ここで頭角を現した。2008年には委員会副主席に任命され、経済学博士号を取得した。彼は、「股票発行審核委員会」（発審委）を根城に、中国企業の新規上場審査を13年間牛耳り、「発審皇帝」の綽名を得た。

胡さんは、對外經濟貿易大学を経て日本留学コースに選抜された。東京大学法学部を卒業後、中国で弁護士（律師）になった。中国で最も著名な弁護士事務所「中倫律師事務所」のパートナーとなり、日本などを対象とする渉外弁護士として活躍した。2011年、胡さんは北京市の「優秀女律師」の称号を受けた。家庭においても、姚氏との間に一人息子・姚亮君に恵まれた。

改革開放の最先端を行くような胡さん夫妻であったが、さしもの「発審皇帝」も、本物の皇帝に睨まれてはひとたまりもなかった。2015年11月、姚氏が中国共産党中央紀律検査委員会により、「重大な規律違反」で取り調べを受けていることが明らかになった。

姚剛落馬 涉江派勢力的經濟政變



胡さんは同年、弁護士事務所を退職、表舞台から姿を消した。この年の夏、中国で株の暴落が起きたが、これを習近平政権に対する「金融政変」と解説する海外の中国語メディアがあった。姚氏は、江沢民の仲間による経済クーデターに加わり、株の空売りで相場を暴落させたと非難された。また姚氏は、山

【写真 2】 姚剛氏（右下）失脚と江沢民勢力との相関

西省出身政治家・経済人の秘密結社「西山会」のメンバーと指弾された。2017年7月、姚氏は中国共産党から党籍剥奪・公職追放処分を受け、司法手続に付されることになった。姚亮君も、多額の株を不正に弄んだなどと報じられた。【写真 2】 2018年9月、河北省邯鄲市中級人民法院（地裁）は、6961 万元（当時のレートで 11 億円余り）の収賄とインサイダー取引の罪で、姚氏に懲役 18 年および罰金 1100 万元の判決を言い渡した。なぜ邯鄲市中級人民法院が管轄したか、筆者には詳らかではないが、「邯鄲の夢」という成語が脳裡に浮かんだのであった。

ユーラシアの広さ

大地の広さを体得するには、昔の人のように歩くのは無理としても、飛行機ではなく、鉄道か船で移動するのが良いに違いない。そこで、間もなく 40 周年を迎える 1983 年の

ユーラシア旅行を、少し詳細に振り返ってみることにした。これは個人旅行ではなく、中ソ国境鉄道の旅を売り物にした団体旅行だった。団体旅行に参加したのは、この一回限りである。査証や乗物の手配など、冷戦時代の東側諸国の旅行にはいろいろな面倒があり、その方面に強い旅行会社のツアーに参加するのが、海外旅行初心者には便利であった。団体といっても、筆者を含めた高校時代の同級生 3 人と、その場で知り合った 3 人の計 6 人である。日本からの添乗員はなく、北京では現地ガイドの楊さん、シベリア鉄道の車内では、ロシア人ガイドが世話をしてくれた。事前に日本の旅行社に全費用を支払い、切符や宿泊券をもらっておく仕組みで、路銀はお土産代だけであった。

8 月 10 日、成田発の飛行機で北京に到着した。北京には 3 泊したが、その間、ガイドの楊さんと、トヨタのマイクロバスが常に一緒であった。空港で 2000 円分両替し、「外貨兌換券」という特殊な紙幣を受け取った。市内でこれを使うと、相手が皆喜んだ。筆談で理由を尋ね、「価値不同」と返ってきた。何を買っても減らず、余ってしまった。故宮や万里の長城、動物園など、観光客が行く場所は一通り案内してもらい、全てが珍しく、現地の人でも日本人を非常に珍しがった。王府井はまだ素朴な商店街で、筆者がとある楽器店に入り、胡弓の一種である小ぶりの京胡を購入すると、歩道に人だかりができていた。彼らは、外国人が何を買うのか、興味があったのだ。これが、ロシア語クラスの胡さんや、その夫になる姚氏が出てきた当時の北京であった。隔世の感というべきか、その変化を見透して留学生を派遣した深謀遠慮には、感服せざるを得ない。

北京は、戦国時代、燕の国の都が存在した場所である。モンゴル帝国のフビライ・ハーンは、「燕京」の場所に本格的な大都市を築き、1267 年、遷都した。都城の建設にあたっては、「里坊制」と呼ばれる、「坊」を単位とした街造りが行われ、50 坊から成る新都を「大都」と命名した。「南鑼鼓巷」は、この当時の街並みを留める、北京で最も古い街区

である。筆者は、2018 年 10 月、東北大学大学院の学生を引率して北京を訪れ、「南鑼鼓巷」も歩いてみた。現在は、古い建物に様々な商店が入居した華やかな商業地になり、繁栄している。【写真 3】

1983 年の旅は、図らずも、「大都」を起点とし、モンゴル大帝国のスケールを実測することになった。8 月 13 日夜、北京駅からモスクワ行きの国際列車に乗車した。一昼夜で



【写真 3】南鑼鼓巷

旧満州北部に到達したが、車中二番目の夜、走行音が変化し、蒸気機関車に牽引されると気付いた。黒龍江省から、内モンゴル自治区に入った最初の駅は、「成吉思汗」（チンギス・ハーン）という。満鉄時代も現在も、駅名に変更はない。国際列車は、成吉思汗

駅を通過してしまう。その先の駅は、「海拉爾」(ハイラル)など、ほとんどがモンゴル語地名の音写である。モンゴル人であれば、故郷に帰った気分になるだろう。車窓風景も大きく変化し、渺茫とした草原、あるいは、ところどころ水をたたえた湿地帯に見える。

8月15日の日中に満洲里に到着した。日本では夏の盛りというのに、冷涼感があり、「シベリア」の連想で持参した上着が役に立った。中国側、ソ連側それぞれで、出入国手続と通関手続がある。乗客は、列車のコンパートメントで待っていれば、係官の方が回ってくる。満洲里を出るときにもらった中国の広報パンフレットは、ソ連側の係官が回収した。ソ連側の国境駅は、「ザバイカルスク」である。ここで、かなりの時間停車した。中国側の線路が、日本の新幹線と同じ標準軌であるのに対し、ソ連側は広軌であり、乗客は荷物を列車に置いたまま、ホームに降ろされる。客車は、一輛ずつ専用のクレーンで吊り上げられ、広軌用の台車に交換する。ザバイカルスクから、シベリア鉄道本線に合流するチタマまでは、線路の整備が良くなく、揺れが激しかった。車掌に聞くと、チタマまでは写真撮影禁止と言う。筆者は、シベリア鉄道本線は撮影可能と解釈した。16日、イルクーツクで国際列車を降り、一泊してバイカル湖を見物した。小瓶に採集したバイカル湖の水は、今でも保管している。17日、「バイカル号」でシベリア鉄道の旅を再開した。イルクーツクからモスクワまで5100キロ余りあり、到着は21日であった。その間、延々と針葉樹の森の中を通過する。モスクワで一泊、モスクワから夜行特急「赤い矢号」で一泊、レニングラードには、23日に着いた。北京を出発してから、10日後である。ここまでの往路、復路は飛行機に乗ったため、省略する。

なお、筆者は1984年秋にも、客船「鑑真号」で上海まで往復した。中国国内の移動手段は、その場で自力で手配した。上海からは鉄道で重慶まで行き、2泊3日の三峡下りの船で武漢に上陸、再び2泊3日揚子江を下って上海に戻り、さらに蘇州と杭州を鉄道と運河の船で回る旅行であった。この日程は、「鑑真号」を予約した旅行社の個人旅行パンフレットに、実例として紹介された。

モンゴルとロシア

モンゴル軍は、モスクワにも来ていた。1238年、城壁に囲まれた小さな街であったモスクワを5日間包囲し、陥落させた。ただし、モンゴルの進軍はシベリア経由ではなく、



【写真4】オストロミール福音書

ペルシアを経由してカフカス山脈を越え、南側から「キエフ・ルーシ」の領域に攻め入ったのである。

筆者は学生時代、しきりに変わったことを勉強してみたいと考えていた。当時、神田神保町の裏通りに、ロシア語専門書店「ナウカ」があった。ある日、ロシア語古文の会の貼り紙を見つけた。この会は、佐々木秀夫愛知大学教授(1925-1989)が、主宰されていた。佐々木教授は、戦前のハルビン学院でロシア語を学ばれたと聞いたが、

ソ連での抑留体験もあり、帰国後は東京外国語大学でロシア古文の講師を 25 年務められたそうである。佐々木教授は、東京外語大を退かれた後、ボランティアとして、月一回の割合で浜松から東京に来てロシア古文を教えられていた。筆者は、面白半分にその会をのぞいたが、内容は非常に高度であった。初回、教会スラヴ語で書かれた 11 世紀の『オストロミール福音書』のコピーを渡された。【写真 4】文字の形からしてなじみはなく、文法は現代ロシア語よりはるかに複雑だった。出席者は、東京外語大出身のロシア語研究者がほとんどであった。当時の教材は、『ロシヤ古文典』という書物にまとめられている。それでも、筆者が 1987 年、シリアに赴任するまで、何回か出席した。ロシア古文は結局身につかなかったが、『原初年代記』など、スラヴ民族の初期の歴史を知る端緒にはなった。また、ロシアとシリアの関わりを理解しようとして、正教会やロシアのキリスト教聖地進出に興味を持った。たまたま 1988 年は、キエフ・ルーシが正教を受容してから千年の節目に当たっていた。赴任先のダマスカスには、様々な宗派の東方キリスト教共同体があり、彼らも、ロシア正教千年祭を認識していた。

キエフ・ルーシは、今のロシアとウクライナの共通の祖先である。2022 年来のウクライナ紛争、あるいはそれ以前から、欧米がウクライナをロシアから切断しようと言辞を弄するのには、違和感を覚える。それは、ロシアの宣伝工作に乗ったからではなく、一昔前まで、ロシア人のみならず、ウクライナ人も当然と受け取っていた、両者の共通の歴史を蔑ろにしているからである。

キエフ・ルーシのヴラディーミル大公（在位 980-1015）は、領域の支配を固め、新たな信仰への帰依を考えた。『原初年代記』に、有名な物語がある。【写真 5】986 年、「ブルガール人」がヴラディーミル大公の前に現れ、ムハンマドの教えを説いた。「公よ、あなたは賢明で知慮が深いが、しかし掟を知らぬ。我らの掟を信じ、ムハンマドに礼拝せよ。」「ブルガール人」とは、ヴォルガ流域のイスラム国家「ヴォルガ・ブルガール」の人々である。「ヴォルガ・ブルガール」については、イブン・ファドラーンが 922 年、アッバース朝イスラーム帝国の使者として訪問しており、旅行記の和訳もある。大公は、ブルガール人の説得を一通り聞いた後、「ルーシの楽しみは、飲むことである。これなしには生きることが出来ぬ。」と答えた。次に「ニエメツツ人」がローマから教皇の使者として来た。「ニエメツツ」は、現代ロシア語ではドイツを指す。ここでは、フランク王国の人物なのだろう。ニエメツツ人は言った。「我らの信仰は光であり、汝らの神々は木である。我らの戒律は、適度の齋戒である。」大公は答えた。「帰って行け。その故は、我らの祖先はそれを受けなかったのであるから。」また、「ハザール人」が来てユダヤ教



【写真 5】『原初年代記』
ヴラディーミルの洗礼

を勧めた。「ハザール人」とは、黒海とカスピ海の間に住んでいた、ユダヤ教徒である。東欧のユダヤ教徒の先祖という説がある。大公は尋ねた。「汝らの土地はどこか？」ハザール人は答えた。「エルサレムにある。」大公は重ねて尋ねた。「今、汝らはそこにいるのか？」ハザール人は言った。「神は我らの先祖に対して激怒し、我らの罪の故に我らを国々に撒きちらし、我らの土地はキリスト教徒に与えられたのである。」すると、大公は答えた。「もし神が、汝らと汝らの掟を愛したとすれば、汝らは他人の土地に撒きちらされはしなかったであろう。我らをも、同様な悪に陥れようと企んでいるのではないか？」最後に、「ギリシア人」が大公のもとに、神学者を遣わした。「ギリシア人」は、東ローマ帝国の人々である。ヘレニズム時代より、東ローマ帝国はギリシア語の文化を受け継いできたから、「ギリシア人」と認識されたのである。神学者は大公に、新旧約聖書の物語を説き、「もし、義しき者らと共に、樂園に行きたいならば、洗礼を受けよ。」と言った。大公はこれを記憶に留め、「しばらく待とう。」と答えた。987年、大公は貴族や長老たちと会議を開いた。大公は、貴族や長老たちの意見に従い、知慮に富む家来10人を、ブルガール人、ニエメッツ人、ギリシア人のところに派遣した。家来たちは戻ると、「ブルガール人には、楽しみはない。」「ニエメッツ人のところでは、いかなる美も見なかった。」と報告した。そして、東ローマ帝国の教会で目撃した荘厳華麗な儀式について、「我らが天上にいたものか、地上にいたものかを知らぬ。地上にはかかる光景、かかる美はない。」と語った。大公は、家来たちの報告を受けてから、なお一年考えた。そして988年、東ローマ皇帝バシレイオス2世に使者を送り、皇帝の妹を妃に迎えたいと伝えた。皇帝は、「キリスト教徒は、異教徒に嫁を与えることはできぬ。」と返答した。大公は、使者に命じた。「皇帝たちにこう言え、我は洗礼を受けるであろう、その故は、我らはこれまで既に汝らの掟を試み、汝らの信仰も儀式も我が意に適うからである。」皇帝はこれを聞いて喜び、妹アンナを大公に与えようと考えた。アンナは、「異教徒のところへは行きません。」と言った。大公は、クリミア半島のケルソネソス（現在のセバストーポリ付近）を攻略中であった。東ローマ皇帝は、妹を説得してケルソネソスに行かせた。大公はその地で洗礼を受け、アンナを娶った。



【地図】モンゴル支配とモスクワ大公国
(黄色の曲線内はモンゴル到達領域)

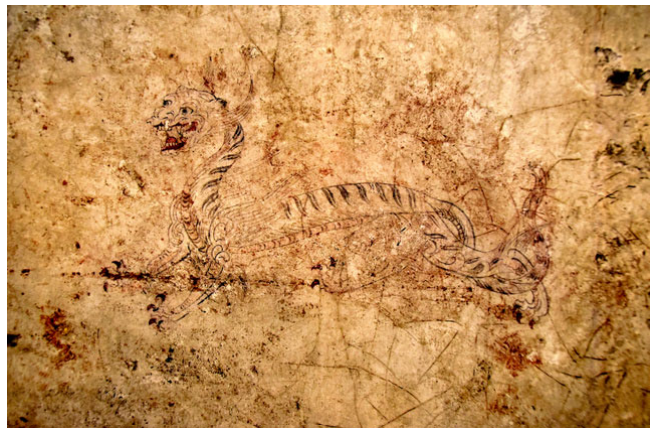
皇帝は、使者に命じた。「皇帝たちにこう言え、我は洗礼を受けるであろう、その故は、我らはこれまで既に汝らの掟を試み、汝らの信仰も儀式も我が意に適うからである。」皇帝はこれを聞いて喜び、妹アンナを大公に与えようと考えた。アンナは、「異教徒のところへは行きません。」と言った。大公は、クリミア半島のケルソネソス（現在のセバストーポリ付近）を攻略中であった。東ローマ皇帝は、妹を説得してケルソネソスに行かせた。大公はその地で洗礼を受け、アンナを娶った。

キエフ・ルーシは、こうして東ローマ帝国から正教の法燈を受け、皇帝と大公は縁戚となった。これは、後にロシア人がモスクワを、ローマ、コンスタンティノープルに次ぐ「第三のローマ」と位置付け、正教の庇護者を自認するに至った歴史的背景であ

る。しかし、キエフ・ルーシは、モンゴルによって滅ぼされてしまう。1223年、モンゴル軍はカルカ河の戦いで、キエフ・ルーシとポロヴェツ人の連合軍を打ち破った。古戦場は、昨今のウクライナ紛争で有名になったマリウポリのすぐそばである。「ポロヴェツ人」とは、キプチャク草原で遊牧生活をしてきたテュルク系の民であるという。モンゴルのバトゥ・ハーン（後のジョチ・ウルス（キプチャク・ハーン国／金帳汗国）君主、在位1242-1255）は本格的な進軍を開始し、1240年にはキエフを占領した。モンゴル軍は、瞬く間にキエフ・ルーシの全領域を席捲した。東スラヴ民族は、モンゴルの支配を受けることになった。【地図】

キエフ・ルーシ滅亡により、従来キエフ・ルーシを構成していた諸公国が分立し、地理的条件に従って生存の道を模索した。北方に位置したモスクワ大公国は、モンゴルへの抵抗を開始し、1480年にはジョチ・ウルスの支配から脱した。こうして、モンゴル支配時代、キエフに代わりモスクワが抬頭した。現在のベラルーシに相当するミンスク公国は、モンゴル征服を免れていた。1242年、ミンスク公国は、13世紀以降強大化したリトアニアの勢力下に入った。1251年、リトアニア大公は、ローマ教皇の手でカトリックの洗礼を受けた。また、リトアニア大公国は1362年、キエフ公国を支配下に収めた。1386年、リトアニアとポーランドは同君連合を形成した。ミンスク公国とキエフ公国は、リトアニア・ポーランド連合によってモンゴルから守られる代償として、キエフ・ルーシの伝統から脱し、カトリックに帰順する圧力を受けた。キエフ・ルーシ以来、東スラヴ地域におけるキリスト教の中心であった正教会キエフ府主教は、1325年、コンスタンティノーブルに避難した。さらに、1453年、オスマン帝国によって東ローマ帝国は滅亡した。一方、モスクワ大公国は、モンゴル支配から独立すると、ミンスク公国やキエフ公国などキエフ・ルーシの領域回復と、正教世界の崩壊を防ぐ役割を自覚するようになった。

なお、ローマ教皇からジョチ・ウルスへの使節として派遣された修道士ヨハネス・デ・プラノ・カルピニ（1185頃-1252）は1246年、バトゥ・ハーンを拝謁した。ヨハネス修道士は、キエフを通過しており、モンゴル侵攻によってキエフは200戸足らずの小村と化したなどと報告した。現代の研究者には、修道士ヨハネスの記述を引用し、モンゴルの侵略によってウクライナはいったん無主の地となり、以後の住民はモスクワ大公国とは別系統と主張する者がある。モンゴル征服直後の状態はともかく、モンゴル時代のキエフ公国がどの程度、キエフ・ルーシの伝統を保っていたか、今となっては冷静な議論は難しいだろう。これに対し、最近の「ネオ・ユーラシア主義」と称されるロシアの歴史家は、キエフ・ルーシの後継者たちにとって、カトリック西方世界からの脅威の方が深刻であり、モンゴル支配者とはむしろ協力関係にあったと主張する。「タタールのくびき」など、苛酷なモンゴル支配は、誇張であると言う。たしかに、抑圧一辺倒では、200年以上の支配は続くまい。あれほど殺戮された後、モンゴルと協力できるか訝しむ向きもあろうが、日米関係を想起すれば十分だろう。



【写真6】高松塚古墳西壁「白虎」

「ベラルーシ」の語源について付言すると、「ベラ」は「白」の意味、文字通りには「白ルーシ」である。これは、匈奴など北方騎馬民族が、漢王朝から受容した五行説に基づき、東西南北に、青白赤黒の色を対応させた名残りとして推測される。高松塚古墳の西の壁には、同じ思想に基づいて、「白虎」が描かれている。【写真 6】ちなみに、「黒海」、「紅海」は海水の色ではなく、方角に対応していると考えられる。西方にあたる地中海は、アラビア語でも「(内陸の) 白海」と呼ばれる。「ウクライナ」の方は、「辺境」・「国境地帯」の意味がある。1569年にリトアニア・ポーランド連合が連邦国家を形成して以降、既にキエフ公国を廃しキエフ県とされていたこの地域を、東方世界に対する前線地域という趣旨で、「ウクライナ」と呼んだとされている。古い露和辞典では、「ウクライナ」を引くと、「小ロシア」と出てくる。上記地図にも、Little Russiaの表記がある。

1596年には、リトアニア・ポーランド連邦国内の正教会信徒を、ローマ教皇に帰順させて「ウクライナ・カトリック教会」に再編しようとする「ブレストの教会合同」をめぐる、正教会信徒は帰順派と拒否派に分裂した。この事件は、ロシア教会の反ローマ感情をさらに高めることになった。ロシアは、17世紀以降の戦役でウクライナとベラルーシを版図に収めた。西方世界では、ポーランド分割の悲劇と描かれる。ロシア人に言わせれば、両地方は元々ポーランドではないのである。

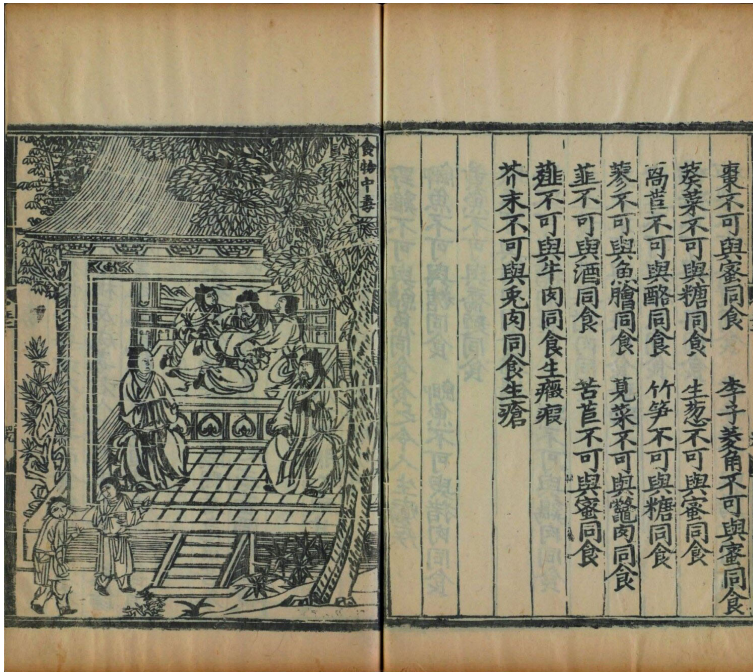
食文化からみたモンゴル帝国の変化

ところで、急激に拡大したモンゴル帝国は、モンゴル人の密度が領土に反比例して低下し、被征服地にますます依存するようになった。中国大陸では、「大都」建設に次いで、1271年には国号を「元」とした。宋と元の文化は、征服王朝への交代にかかわらず、共通する面も多い。西アジアでは、チンギス・ハーンの孫フラグ・ハーンがペルシアとイラクに遠征し、1258年バグダードを攻撃した。形式的に続いていたアッバース朝のカリフは殺害され、バグダードは灰燼に帰した。フラグ・ハーンが建国したイル・ハーン朝(1256-1336頃)は、ペルシア系官僚や文人に支えられ、近世ペルシア文学が開花した。政治家としても活躍したジュヴァイニー(1283没)は、チンギス・ハーン伝を含む『世界征服者の歴史』をペルシア語で著した。第7代君主ガザン・ハーンは1295年、1万人のモンゴル人と共にイスラームに集団改宗した。こうして征服王朝として建てられたイル・ハーン朝は、イスラームとペルシア文化に吸収されてしまった。

モンゴル帝国が、領域の膨張によってどのように変化したかを、食文化から示そうとした研究がある。帝国初期の食文化については、『元朝秘史』が基本史料である。『元朝秘史』は、チンギス・ハーン一代記を中心とした書物で、13世紀成立とされる。それによると、モンゴル初期、チンギス・ハーン時代には、羊、馬、牛、山羊、駱駝といった家畜が食され、これらにタルバガン(ボバク・マーモット)、鳥、魚などの狩猟動物が加わる。家畜の中では羊が最も重要で、血や内臓を含むほとんど全てが食用とされる。また、羊の乳やバター、チーズも利用される。馬からは肉のほかに乳、とりわけ馬乳酒が得られる。駱駝の乳からも酒が作られるが、駱駝の肉の利用は例外的である。マルコ・ポーロによれば、モンゴル人は狩りに出て鹿や虎、熊なども捕ったという。穀物は、戦利品または交易で得たものを食したが、次第に消費量が増加した。さらに野生の穀類や野菜、根菜、果物、キノコなどを食べていた。肉類は焼くか煮て、食卓に供された。食材には、生か、乾して

使用するものもあった。ただし、モンゴル人は漢民族と同様、乳糖不耐症で、乳をそのまま飲むことはなかった。

これに対し、モンゴル帝国が拡大すると、食文化の変化が顕著になった。史料は、モンゴル皇帝の食事について「飲膳太医」の官にあった忽恩慧が1330年に書いた『飲膳正要』【写真7】と、元代の日用類書で撰者不詳の『居家必要事類全集』である。まず目立つのは、酒消費の増加である。麦酒、葡萄酒、蒸留酒（阿刺吉酒・アラビア語「アラク」）な



【写真7】『飲膳正要』

などを飲むようになり、少量であれば健康に害のなかった馬乳酒の消費量が増えた。次に穀物、特に中国征服をきっかけとして、小麦製品の消費が増大した。1240年代にジョチ・ウルスを訪問した修道士ヨハンネス・デ・プラノ・カルピニは、伝統的なモンゴルの食事に加え、煮炊きした穀類が常用されていると報告した。この修道士は、モンゴル人が人肉を喰らうとも書いているが、その報告の信憑性を疑わせる記述であろう。1253年にフランス王によりモンゴル帝国に派遣されたウィリアム・ルブルックは、モンゴル人は素朴

なパンを焼いていると記した。『飲膳正要』には、「聚珍異饌」と題して、95種類の料理が紹介されている。食材としては、虎や豹まで言及され、豚肉についての記載もある。しかし、実際の調理法に言及される食肉は、羊が圧倒的に多く、次いで「鷄子」が出てくる。野菜では、ネギ・ショウガへの言及が多い。調理法としては、モンゴルの伝統料理である、大鍋を用いた煮込み料理が多数掲載されている。これらは、肉や野菜を煮込んだスープに、米やヒヨコ豆を加えた料理である。一方でモンゴル人にとって全く新しい料理もある。例えば西アジア由来の甘味「舎兒別」（シャーベット・アラビア語起源）であり、「五味子」の新鮮な果実を「白沙糖」と共に煮詰めるよう指示がある。『居家必要事類全集』にも、シャーベットは「攝里白」の名で登場する。当時「砂糖局」が杭州に置かれ、泉州が白沙糖の産地であった。元時代の『山居新語』には、「糖官は皆、主機、回回の富商なり」とあり、西アジアから移住したユダヤ教徒とムスリムが砂糖生産を独占していた。テュルク起源の料理としては、パン・蒸パン・麺の記載がある。蒸パンは、中国に入り饅頭となった。元王朝の食卓は豊かになったが、これほど農耕民の食材に馴染んでしまえば、機動的な遊牧生活はもはや昔の話であろう。

再びユーラシア時代は来るか

往年の戦略論に、海上権力と陸上権力を対比させる議論があった。もちろん、ある勢力がどちらに属するか、単純化することはできない。古代ギリシアのように、島づたいに発展した都市国家群が、アレキサンダー大王の時代、突然陸上の帝国となった例もある。口

ローマ帝国は地中海を中心とした世界を築き、ゲルマン人は欧州大陸に拠って対抗したと図式化することも、一つの見方であろう。いずれにせよ、モンゴル帝国が、ユーラシア大陸を舞台にした巨大陸上権力を現出したことは、疑いないだろう。もっとも、モンゴル人は、現代人が想像するように、全帝国を中央集権的に支配したのではなく、それぞれの領域に拡散し、被征服地に同化し、埋没してしまった。モンゴル帝国の拡大に伴い、欧州諸国は脅威を感じ、大西洋に新たな発展の可能性、ないしは避難路を求めたということだろう。かくして、欧州諸国は海上権力に転じることによって、新たに覇を唱えるに至ったと考えることができる。アメリカやオーストラリアなどは、それ自体大陸であり、固有の歴史はあるが、大まかに見た場合、欧州の変種でもあり、海上権力の振舞いで、太平洋に出たのである。そして、中国・ロシア・インドなどの古い帝国を内陸に封じ込め、日本を降伏させ、七つの海を覆い尽くした。このような文明論を仮設した場合、現代は、海上権力が世界を席卷していると理解できる。より詳細に見れば、冷戦があり、対テロ戦争があり、無数の地域紛争があった。

しかし、モンゴル帝国によるユーラシア支配が、海洋国家の時代を拓いたように、いま、欧米の海上権力が、七つの海を飽和させた瞬間、今度は大陸国家の時代に振り子が戻らないとも限らない。G7 に象徴される「先進国クラブ」は、海上権力の発想による国際秩序を形成し、自分たちの価値観に従わない勢力に制裁を加えてきた。ところが、度の過ぎた国際社会の管理を試みた揚げ句、ユーラシアの内陸に陸上権力の岩盤があるらしいと気付いた。反抗的な政権を追い詰めたため、ロシア、中国、イラン、北朝鮮などの結束を招いてしまった。「先進国クラブ」は、目下、この岩盤を破壊すべく、ウクライナの自由、あるいは新疆の人権を掲げて総力を結集し、権威主義的体制に退場を迫り、諸州を分解して独立を与えようとしている。もし、これに失敗すれば、一大転機となることは間違いない。主客たちどころに入れ替わり、数世紀にわたる海上権力の支配に甘んじてきた諸国は、一斉に陸上権力の側につき、報復を始めることだろう。